

児童養護施設入所児を対象としたことばキャンプの効果

—小学生版 QOL 尺度（Kid-KINDL^R）を用いて—

Effects of the “Kotoba Camps” for Children Living in Children’s Homes
Using the elementary school version of the QOL Questionnaires (Kid-KINDL^R)

高 取 しづか ・ 古 莊 純 一
(Shizuka TAKATORI Junichi FURUSHO)

和文抄録

はじめに：児童養護施設の入所児は被虐待児が多く、それ以外にも家族との離別など、小児期逆説体験を抱えており、自分の気持ちや感情を的確に伝える言葉をもたない。入所中の支援はトラウマケアに焦点が当てられて、将来に向けて社会的スキルをつける支援はまだ不十分である。

研究目的：児童養護施設入所児の社会スキル向上を目指したことばキャンプは、参加児の自尊感情育成に寄与することを検証する。

研究方法：児童養護施設の入所児を対象に「ことばキャンプ」を、1回2時間6クール施行し、1回目実施前と6回目実施後に、小学生版 QOL 尺度（Kid-KINDL^R）を用いて有用性を検討した。ことばキャンプは、筆者らが開発した集団ゲームを取り入れたソーシャルスキルトレーニングで、楽しく能動的な参加が可能な支援法である。対象は、関東近郊の19の児童養護施設に入所している小学生（4-6年）127名である。

結果：ことばキャンプ終了後、QOL 総得点および「自尊感情」得点が有意に上昇し、「精神的健康」「友だち」「家族」も上昇した。一方、「学校生活」が有意に低下した。個々の事例では「自尊感情」が前後で低下した一群がみられた。

考察：児童養護施設入所児の多くは自尊感情が低い。ことばキャンプで社会的スキルを身につけることで自尊感情が上昇する。一方で、高すぎる一部の子は、自身を客観視できるようになり、自尊感情が低下すると推測した。学校生活の低下は、自身の立場を客観視できるようになった可能性を考えた。

結論：ことばキャンプは、児童養護施設入所児の社会的スキルを向上させるだけでなく、自尊感情を適正化させた。

キーワード

ことばキャンプ、児童養護施設、Kid-KINDL^R、自尊感情、QOL 尺度

1. はじめに

児童養護施設は、保護者のいない子どもや家庭における養育が困難な子どもが入所する施設として設けられた。しかし近年の入所理由は、虐待、ネグレクトが増加している。こども家庭庁「社会的養護の施設等について」¹⁾によれば、全国の児童養護施設入所児のうち、虐待を受けた子どもは65.6%、何らかの障害を持つ子どもが36.7%であり、専門的なケアの必要性が増している。

入所児の特徴についての研究では、坪井²⁾は、Child Behavior Checklist (CBCL)³⁾を用いて、被虐待体験児の「社会性、注意、攻撃的行動の問題」を報告した。西澤ら⁴⁾は、トラウマ反応の測定尺度 Trauma Symptom Checklist for Children (TSCC)⁵⁾を用いて、身体的虐待を受けて施設に入所している子どもは「不安」と「怒り」の反応が高く「自尊心の欠如」の傾向が認められるとしている。堤ら⁶⁾は、入所前に虐待経験をを受けた子どもと不適応行動の関連について「他者への暴力や威圧的態度、学校や学習への意欲喪失、親密な人間関係の障害、自己中心的傾向」等の不適応行動を明らかにしている。

こうした児童養護施設入所児に対する支援は、安全で安心な環境の確保と、専門家による医療、心理支援が中心となっている。その中でも自立に向けた実践活動は、それぞれの施設や職員が行っているものの、広く普及している方法はなく、またその効果が評価されているものは少ない。畠山⁷⁾は「児童養護施設退所児にとっての『自立』の時期は『期限切れ』」であるがゆえに、「同年代で一般家庭から自立する子どもたちに比べてはるかに不利である」とも述べ、「18歳で退所するまでになるべく多くの自立を目的とした援助が行われることが望まれる」としている。村瀬⁸⁾は「社会的養護児童の多くは、成育歴の中で気持ちを伝える言葉かけをしてもらった経験が乏しく、自分の内面と言葉を結びつける術を学んでいないから自分の気持ちや感情を的確に伝える言葉を持たない。のど元まで出ている謝罪の言葉とはうらはらに雑な反抗的とすら受け取られる言葉を吐く。時には暴力へと向かい」人間関係がこじれていく。しかしその背景には「成育歴の中で気持ちを伝える言葉かけをしてもらった経験が乏しく、自分の内面と言葉を結びつける術を学んでいないから」と述べている。そのため、言葉を使って人とかかわる力をつける支援が必要である。

永井⁹⁾は、被虐待児を支援するすべての専門職に共通に必要なものとして①人間関係の回復、②社会的スキルの学習、③当り前の日常生活の保障の3点が重要と指摘し、その中でも社会的スキルの学習のためには、構造化されたグループの中で体系的に個々の子どもに合った社会的スキルを学ぶことができるソーシャルスキルトレーニング Social skills training；以下 SST）が有効である」永井⁹⁾と述べている。児童養護施設の中で SST を行った宮内¹⁰⁾は、「自分に自信がなく、周囲とのコミュニケーションがうまくできず、いじめや喧嘩など、人間関係でトラブルを起こす傾向にある」子どもでも「生活環境を整え、コミュニケーションの方法を学習することで、対人関係の取り方が修復できる」ことを明らかにし、SST の必要性を伝えている。しかしまだ日々の業務に追われる児童養護施設では、SST を取り入れているところは多くない。

2. ことばキャンプの開発

我々は、子どもが能動的に参加する楽しい SST プログラムを独自で開発を目指した。開発にあたっては、米国滞在中、日本人の子どもの言葉が少ないのは、ことばを省略し「以心伝心」「察する」日本の文化に起因することを痛感した背景がある。異文化コミュニケーションと米国の教育事情に詳しい、ミシガン州立オークランド大学の志知朝江氏に師事し「日米のコミュニケーション文化の違い」や「アサーティブな自己主張」¹¹⁾を学んだ。

実践活動として2年間にわたり、ミシガン州の幼・小・中・高校で行われていたオーラルコミュニケーション教育、Project（課題）のまとめの Presentation（自分の考えをまとめて発表する）と Discussion、準備過程の思考の整理法、Critical thinking ,Critical reading 等の授業に参加した。オーラルコミュニケーションとは、文面や筆記でやりとりするのではなく、実際に人と人が双方向に話し聞くやりとり（two way communication）のことである。

また、学校長や教師、親へのインタビューを行い、ミシガン州教育長のジャッキーモース氏（当時）にも面会し、米国の公教育で行われているオーラルコミュニケーション教育の現状と内容についてインタビューを行った。長田¹²⁾によれば、1990年から米国の公教育が国家レベル・州カリキュラムレベルでコミュニケーション教育が推進されており、我々が学校を見学した1990年代後半は州レベルで浸透していた時期であった。

帰国後、米国で取材した内容を整理して「7つの力」（度胸力、論理力、理解力、応答力、語彙力、説得力、プレゼン力）のトレーニングにまとめ、『親子で育てる「じぶん表現力」』¹³⁾や『イラスト版気持ちの伝え方コミュニケーションに自信がつく44のトレーニング』¹⁴⁾を出版した。日本の以心伝心の文化に、海外の学校や家庭で行われているトレーニングを加味しようという新しい提案である。

その後コーチング法を学び、「強化法とモデリング」「コーチング法」の技法を取り入れたトレーニングプログラムを開発した。予備的調査として横浜市内の某幼稚園の年長児2クラス（1クラス23～25名）で3年間の検証を重ね「ことばを使った楽しいアクティビティー」の意味で「ことばキャンプ」と命名した。

佐藤ら¹⁵⁾は「強化法とモデリング法」「仲間媒介法」「コーチング法」「社会的問題解決スキル訓練」のいずれかが用いられている介入を SST と定義している。ことばキャンプは、「強化法とモデリング」「コーチング法」の技法を用い、安達ら¹⁶⁾の呈示する主体的な表現を促す「主体性モデル」を取り入れた SST である。

プログラムの流れは、自己決定・自己主張トレーニング（基本のワーク）を行ったあと、7つの力を狙いにしたワークとゲームで構成されている。1クールごとにテーマが異なるが、どの回も導入で、聞く態度の徹底と集中して聞くこと、話し手の意見を尊重することを目的にした「グランドルール」を設定し心理的安全の場を確保した上で、主体的に発言する練習を繰り返す。適宜児童に対し肯定的メッセージ「花マルメッセージ」を伝えて、社会的スキルの定着を図っている。

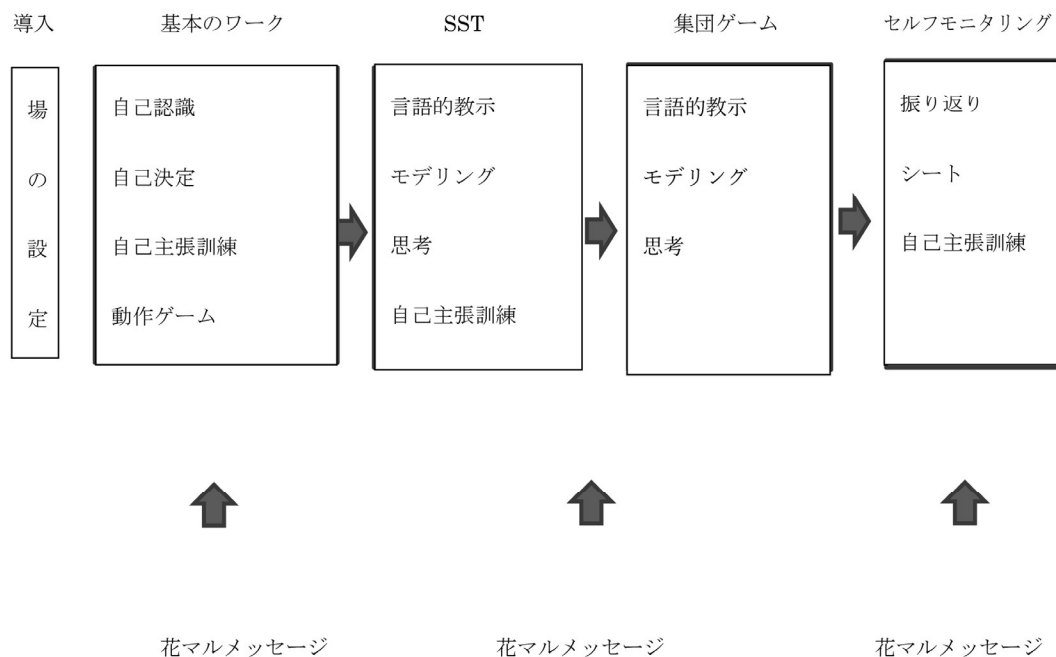


図1 ことばキャンププログラムの流れ

3. ことばキャンプの児童養護施設での実践

入所中にコミュニケーション能力をつけることが必要と考えている児童養護施設長の要請を受け、2008年よりことばキャンプを東京都の児童養護施設内で行うこととなった。子どもと共に児童養護施設の職員を対象にしたコミュニケーション力育成研修も行い、施設全体の養育に浸透することで子どもへの継続的な支援をめざしてきた¹⁷⁾。児童養護施設の実践活動にあたっては、児童精神科医の佐々木正美氏の指導を受け、発達障害児が受けやすいよう「プログラムの全体像や重点ポイントが見えるところに表示」「児童に選択させ、強制しない」などの点を修正し、児童養護施設の児童を対象にしたプログラムを開発した。さらに実践しながら修正を加えて現在のプログラム「ことばキャンプ」となった。神奈川県立保健福祉大学で研究テーマにし「ことばキャンプ」プログラムとして認可された。

表1 各回のテーマと、場の設定

	テーマ	SST ワーク	集団ゲーム
第1回	聞く力を育てる	聞く耳モード (理解力トレーニング)	伝言ゲーム (理解力トレーニング)
第2回	相手の話を理解する力を 育てる	聞き取りワーク (理解力トレーニング)	ステレオゲーム (度胸力トレーニング)
第3回	ていねいな言い方について 考える	クッションことば (語彙力トレーニング)	ドッカンゲーム (語彙力トレーニング)
第4回	相手の気持ちを考える 視点を変える	見方を変えよう (応答力トレーニング)	3ヒントゲーム (語彙力トレーニング)
第5回	受け応えをする力を身に つける	インタビューしよう (応答力トレーニング)	ジェスチャー (プレゼン力トレーニング)
第6回	話を組み立て、発表する	プレゼンテーション (度胸力・論理力・説得力トレーニング)	修了式
導入 (共通)	場の設定 (グラドルール)	①意見がある時は手をあげよう ②話している人の時間を大切にしよう ③聞く耳モードで聞こう	

4. 研究目的

児童養護施設入所児を対象とした支援は、トラウマケアに焦点が当てられて、将来に向けての、社会的スキルを身に着ける支援はまだ不十分と思われる。今回我々のことばキャンプは、入所児の社会的スキル向上と自尊感情の育成を目指した実践である。

ことばキャンプは、参加児のトラウマケアを主目的とせず、生きていくことの土台となる自尊感情育成に寄与することを目指した実践でもある。

その背景には、2008年から東京都や神奈川県の子童養護施設で実践を続けていく中で、施設職員から「子どもも職員も肯定的な見方や考え方ができるようになった」「得意なものを見つけ自尊心を伸ばしつつ、コミュニケーション技術が身についてきた」「自信をもって書いたり話したりと、他児の視線を気にすることなく行動できるようになった」「相手を気づかう言葉を考えたり、皆の前でしっかり発表できるようになった」などの施設側からの報告があったことで、社会的スキル獲得と、参加児が自信を持ったことと推測した。

これらの実践で得られた成果を、QOL 尺度を用いて検証することを目的とした。

5. 研究方法

研究対象

東京都、神奈川県、千葉県の19児童養護施設に入所している小学生（4～6年）のうち、施設職員が該当学年の子どもに声をかけて意思を確認し合意が得られて参加した175名（女子81名、男子

94名)のうち有効回答127名(女子61名、男子66名)を分析対象とした。

研究期間

調査期間 2014年4月～2017年3月

分析期間 2018年2月～4月

実践方法

ことばキャンプは1回2時間を6回実施する。2週間間隔で3か月かけて行った。グループは子ども10人以内とし、施設職員が数名、独自に養成したスタッフが1-2名参加した。子どもの選別については、施設が対象学年の子どもに声をかけて、参加については子どもが自分の意思によって決めた。

評価尺度

ことばキャンプの支援効果を評価するには、社会的スキルの測定尺度と、自尊感情測定尺度の2つが必要である。社会的スキルの測定尺度として Kiss¹⁸⁾ などが開発されている。また自尊感情の代表的尺度として Rosenberg Self Esteem Scale (RSES)¹⁹⁾ をはじめ多くの尺度を検討したところ、子ども向けでないことや被虐待児には心理的負担が大きいと判断した。

そこでそれぞれ単独の尺度でなく、自尊感情を含む小児用 QOL 尺度²⁰⁾ である Kid-KINDL^R を使用し、包括的な効果を評価することとした。

Kid-KINDL^R は、子ども自身が、6つの下位領域(身体的健康、精神的健康、自尊感情、家族、友だち、学校生活)の、各4項目の質問に5択で回答し、それを得点化して評価するものである。

Kid-KINDL^R は、KidKINDL_children_7-13y と KidKINDL_children_14-17y の2種あるが、柴田らは²¹⁾ はそれを翻訳し、7歳から13歳を対象としたものを小学生版 QOL 尺度とした。さらに、信頼性妥当性および、簡便で使用しやすく、かつ臨床につながりやすいことを報告した²¹⁾。

評価項目として「自尊感情」があること、また下位領域「家族」と「友だち」は、人とのかわわりを主観的に問う質問であり、社会的スキルを測ることができる。実践の場では「家族」の質問は、「親」を主担当の「職員」に変更し、イメージしやすいように指示した。

介入前後の得点は、t 検定を用いて統計処理を行い比較した。

倫理的配慮

本研究は、神奈川県立保健福祉大学倫理委員会に申請し承認を得て実施した(保大第10-5)。

児童養護施設入所児を対象とした調査は、より厳重な個人情報の保護が求められる。実施にあたり施設を訪問し、施設長に研究の趣旨を説明し協力を依頼した。個人が特定されることなく、また個人情報の漏えいなく行うこと、守秘義務を順守することなどを文書で施設長、担当職員に説明し、同意書を作成した。

対象児には、施設長と子どもを担当する職員が口頭で説明し、参加は自由意思によるものであること、途中で参加を取りやめても不利益は被らないこと、強制しないことを説明した。質問紙調査時は、職員が説明や観察しないこと、強制しないこと、などの配慮をお願いした。参加者は、番号

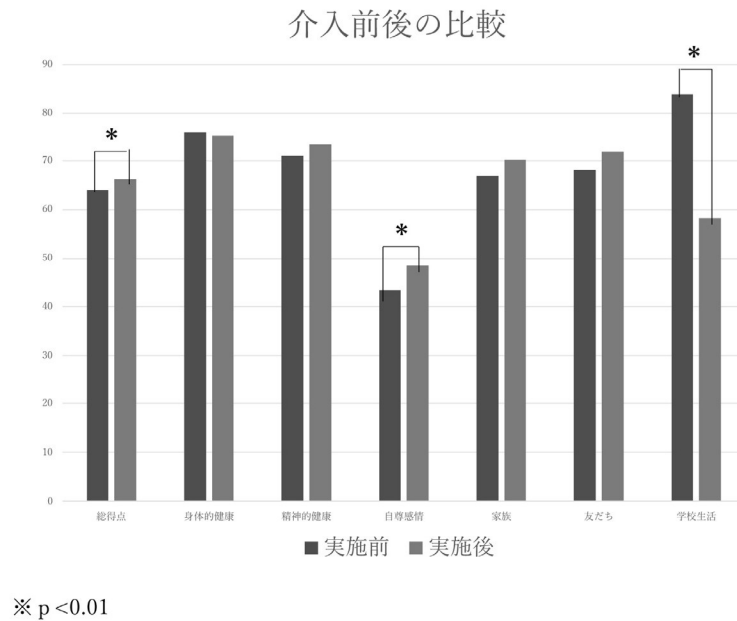


図2 介入前後の QOL 得点の比較

としてデータ化し、研究者の自宅でインターネット接続せず、カギのかかる引き出しに保管した。

6. 結果

（1）ことばキャンプ介入前と介入後の比較

子どもの QOL 総得点は、介入前64.3から介入後66.17と有意に上昇した（ $P < 0.01$ ）。

下位領域では、「自尊感情」は43.36から48.27有意に上昇した（ $P < 0.01$ ）。有意差はないものの「家族」は66.83から70.18へ、「友だち」は68.16から71.75へ上昇した。一方、学校生活は83.86から58.17へ、有意に低下した（ $P < 0.01$ ）。

（2）文献平均値と入所児平均値との比較

今回我々は、家庭で生活する一般の子どもの調査は行っていないため、文献からえられた一般の小学4年～6年生の子どもの対象にした QOL の平均値²⁰⁾と比較した。従って、有意差検定は試行していない。平均値と比較して、介入前は入所児童の総得点および下位領域の精神的健康、自尊感情、友だち、家族の得点は低い傾向にあった。一方で、入所児の学校生活の得点は平均値よりも高かった。介入後は、平均値の子どもの入所児の QOL 総得点は差がなく、下位領域では自尊感情が高く、学校生活が低くなった。

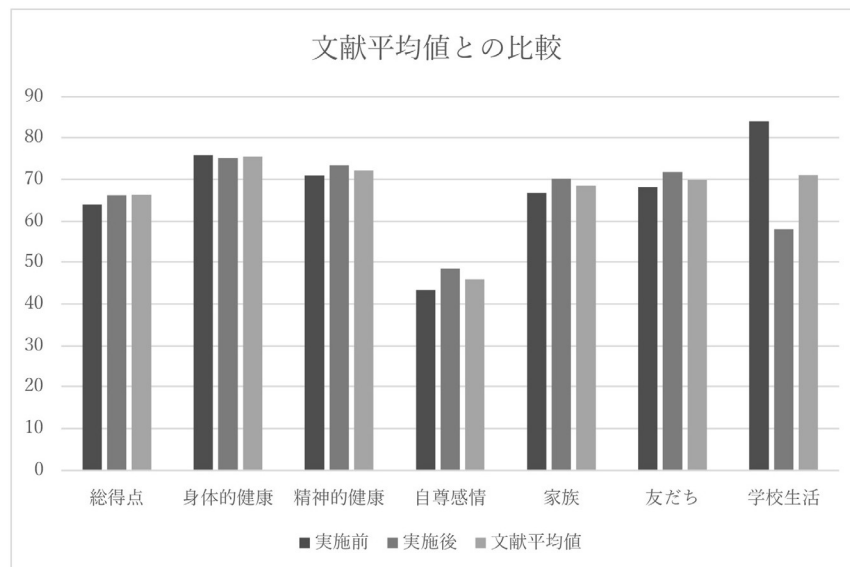


図3 介入前後の文献平均値との比較

表2 自尊感情得点の変化

自尊感情得点 (平均値比)	観測数	実施前平均	実施後平均
+2SD 以上群	34	77.02	63.24*
+2SD 未満群	93	31.05	43.08*

※ $p<0.01$

(3) 個々の自尊感情得点の変化

全体として自尊感情得点は有意に上昇したが、介入前に非常に高かった一部の子どもがキャンプ後に低下した。そこで、介入前の自尊感情得点が文献平均値の +2SD (66.8) 以上の得点群 (+2SD 以上群) と、それ以外の群 (+2SD 未満群) の 2 群に分けて、前後の得点を比較した。+2SD 以上のグループ前後で有意に低下し ($p<0.01$)、+2SD 未満群は有意に上昇した ($p<0.01$)。

(4) 事例提示

自尊感情得点が上がった事例と下がった事例を提示する。個人情報保護のため、事例は複数の事例の特徴をまとめたうえで、細部に修正を加えたフィクションの事例である。

<自尊感情が上がった事例>

A は、キャンプ実施前、「自分なんて無理」「できっこない」と発言し、初回では「つまらない」「早く帰りたい」など投げやりな態度が多く、場を乱す発言が見られた。しかし、回を重ねるうちに集中する時間が多くなってきた。投げやりな言動が減り、ワークに積極的に参加する行動に変わって

きた。キャンプ終了時、言葉使いが丁寧になり、他者の発言を聞いて反応することが増えた。開始前は、発言を促されて消極的、否定的な発言が目立ったが、終了時には自発的、積極的な発言も見られた。

＜自尊感情が下がった事例＞

Bは、実施前はすぐ「そんなことできる」を連発していた。人の話を確認する前に発言を行ったり、行動する特徴もあった。最初の回は、気に入らないことがあると部屋を飛び出したり、カーテンの裏に隠れるなどの行動があったが、回を重ねるうちに、周囲を意識するようになり「そんなことできる」という発言が減った。次いで、自分自身の行動を他の参加者と比較し、他者の良いところを認める発言ができるようになった。「人に対しての接し方や、態度、聞き方がわかった」と感想を述べていたことは、ことばキャンプによって社会的スキルを学んだと推察される。

7. 考察

（1）ことばキャンプ介入前後で総得点の差

参加した実施後施設職員から、「自主性がでてきた」「怒りを制御できるようになった」「肯定的な見方、考え方ができるようになった」「他者を気遣うことができるようになった」「自信が持てたようだ」などと、主観的に対象児の変化を評価する意見が多数得られた。それらの主観的な評価が、Kid-KINDL^Rを用い、QOL得点の有意な上昇から、客観的に評価できたといえよう。

また総得点の上昇は、自尊感情得点だけでなく、下位領域の「家族」「友だち」の得点が介入後上昇したことから、人間関係を構築する社会的スキルを獲得したことを、キャンプ参加児が自身で実感していると推測した。

（2）自尊感情得点の上昇

今回我々のプログラムは、SSTの手法を用いて社会的スキルを身につけ、自尊感情の育成を目標としたものである。

コミュニケーションスキルと自尊感情の関係についてA.Wホープ²²⁾は「他者から認められるには良好な人間関係が必要であり、そのためには他人とうまく付き合っているような対人技能、すなわちコミュニケーションスキルを獲得する必要がある」と述べている。

戸ヶ崎²³⁾は対人関係における社会的スキルを獲得することが自尊感情を高める効果があることを示した。池谷²⁴⁾は、ピア・サポート・プログラム（子ども同志が互いに支え合える関係づくりを目指すSST）は攻撃性を軽減する効果があり、社会的スキルが伸びた群ほど自尊感情が伸びているという結果を示している。佐藤²⁵⁾は、良好な人間関係構築に結びつけたコミュニケーションスキルプログラムに取り組むことが、自尊心を高めることに有効かどうか実践を通して検証した。本研究は、これらの知見を、尺度評価により肯定する結果であった。

また、柴田²¹⁾は、QOL尺度は、信頼性、妥当性のある安定した尺度であるとしている。臨床

としては、支援効果を判断するのにも優れた尺度である³⁶⁾。今回も、支援効果を反映したと考えられる。

(3) 介入後に自尊感情得点が低下した事例について

渡辺²⁷⁾は、入所児について、自尊感情と精神的健康との関連を明らかにする研究から、自尊感情の高い子どもは精神的健康度も良好とし、精神的健康度が高く自尊感情も高い入所児童の存在を認めている。門永²⁸⁾も、リスク要因のある状態に置かれているにもかかわらず良好に発達する子どもや、リスク要因からダメージを受けても比較的早く回復する子どももいる、と述べている。しかしこれらの報告は、個々の子どもの特性についてはふれていない。

今回のことばキャンプで、介入前に自尊感情が高い子どもは、発達障害（神経発達症）の傾向を持ち合わせていた可能性を考えた。これらの子どもは、ことばキャンプ介入後に低下した。Rutter²⁹⁾らは、被虐待児の ADHD（Attention Deficit Hyperactivity Disorder）類似の特性は、安定した環境により改善すると述べている。共著者の古荘は、ADHD などの発達障害のある子どもは自尊感情が本来高いが、治療的介入³⁰⁾や経過観察中³¹⁾に低下することを報告している。このことから、発達障害の傾向のある子どもがことばキャンプに参加し、自分を客観視するようになったことで、自尊感情の低下がみられると考えられた。

また、必要以上に自己をアピールして「オレ様が」と言う「誇大自己」を持つ子どもが、キャンプ後に自尊感情が低下したことが、参加した職員スタッフにより報告されている。

実践者の言葉によると、自分が他者から肯定的に見られ、声をかけられる（花マルメッセージ）体験をすることで、他者にも同様の行動をとり、他者をほめることができるようになるという。それを繰り返すことで他者の良さを自発的に認めるようになる。一方で、自分の至らない点を客観的に認識することで、自己への評価が下がったと推察した。

(4) 文献平均値と入所児平均値との比較

柴田ら³²⁾は、QOL 尺度は、日本国内の調査では地域差や男女差もなく標準化しているが、下位領域では地域差や男女差があり、6 領域の中では自尊感情得点が著しく低いことから、QOL 総得点を含めて検討することを指摘している。介入前後で QOL 総得点は上昇し、文献平均値とほぼ同程度であった。一方、下位領域の自尊感情得点は、介入前は文献値より低かったが、介入後は、海外と比較して低いとされる日本の子どもの自尊感情得点³²⁾よりも高くなった。低すぎるとも考えられる参加児の自尊感情得点が、キャンプ後に上昇した事実は、キャンプの効果を肯定するものであろう。

(5) 自尊感情の適正化

キャンプ終了後、多くの子どもは自尊感情得点が上昇したが、キャンプ前に自尊感情得点が高い

子どもは、終了後にそれが低下した。全体の傾向として、自尊感情得点が上昇したことは前述したように、社会的スキル獲得が自尊感情の育成に寄与するという知見を肯定する結果になった。

一方、低下したケースは、事例に提示したように、発達障害特性があり自分を客観視できなかった子どもが、ゲーム形式で選ばせたり質問に答えることをくり返すことで、自分を客観的に見ることができるようになり、自尊感情得点の低下になったと推察される³⁴⁾。また、ことばキャンプを実施する過程で、肯定的な視点でメッセージを受ける体験を重ねているうちに、自発的に他者を認める発言をするようになることで、相対的に自己評価が下がったと推察される。自尊感情得点が下がったことは、子どもの成長の観点から見ると悪い変化ではなく、高すぎる評価が「適正化した」変化ととらえることができるだろう。

自尊感情は得点が高いから良いとか、低いから無理に高めようということではなく、安定した自己認識を保つことが重要である³⁵⁾。参加者の自尊感情得点の差が縮小したことからも、自尊感情の適正化と言えるだろう。

（6）学校生活の低下について

学校生活の得点低下は予想できなかった。類似の研究報告も見当たらないため、施設の施設長や職員の意見交換を行った。対象児が通学する学校では、生育歴をふまえて個々に配慮されていた。キャンプ前はそれが当然のこととしていたが、ことばキャンプ介入によって、自身の学校生活をより客観視することができたのではないかと推測した。

（7）限界と課題

ことばキャンプは、我々が開発した独自のプログラムであり、海外では家庭的養護が主体で類似の取り組みは行われておらず、海外の先行研究と比較することができなかった。児童養護施設入所児の個人情報の取り扱いはむずかしく、一人ひとりの診察情報や画像検査、学校の様子などを含めた詳細な分析ができない。本研究においても、今後、児童養護施設での大規模研究、比較研究、縦断研究を行うことが困難である。

児童養護施設入所児の個人情報の取り扱いはむずかしく、一人ひとりの診察情報や画像検査、学校の様子などを含めた詳細な分析はできず、限界がある。

介入によって変化した結果についての他者評価は必要と考えており、本研究と合わせて実施した児童養護施設の養育者向けのアンケートを分析した論文の作成を考えたい。

8. 結論

ことばキャンプ前後において、QOL 総得点と自尊感情得点が上昇し、学校生活得点が下降した。以上から、ことばキャンプは、児童養護施設入所児の社会的スキルを向上させるだけでなく、自尊感情を適正化させると考えた。

謝辞；

テーマのご指導と研究申請に貴重なお助言をいただいた神奈川県立保健福祉大学教授新保幸男先生、集計・分析協力の跡見学園女子大学大学院人文科学研究科の掛山裕晋氏、またご協力いただいた児童養護施設関係者の方々、参加してくれた子どもたちにも厚く御礼を申し上げます。

私は、2015年に、科目等履修生として教育人間科学研究科教育学専攻で古荘純一先生の講義を受講し、Kid-KINDL^R 使用法など多大なお指導をいただきました。また、専門演習のゼミ生にもボランティアとしてキャンプに参加していただいたこともあります。このような貴重な体験をふまえた研究論文を、ご厚意により青山学院大学教育学会「教育研究」に掲載の機会をいただきましたことを心より感謝申し上げます。

文献

- 1) こども家庭庁. 社会的養護の施設等について.
<https://www.cfa.go.jp/policies/shakaiteki-yougo/shisetsu-gaiyou/> 参照2023年12月7日
- 2) 坪井裕子. Child Behavior Checklist (CBCL) による被虐待児の行動と情緒の特徴—児童養護施設における調査の検討. 教育心理学研究 2005; 53: 110-121
- 3) Achenbach TM & Rescorla LA. Manual for the ASEBA School-Age Forms & Profiles. Burlington, VT, University of Vermont, Research Center for Children, Youth, & Families. 2001
- 4) 西澤哲, 中島健一, 三浦恭子. 養護施設に入所中の子どものトラウマに関する研究—虐待体験と TSCC によるトラウマ反応の測定—. 日本社会事業大学社会事業研究所1999; 31-36
- 5) Briere, J. Trauma Symptom Checklist for Children (TSCC), Professional Manual. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources. 1996.
- 6) 堤賢, 高橋利一, 西澤哲他. 被虐待調査研究—児童養護施設における入所以前の経験と施設での生活状況に関する調査研究. 日本社会事業大学社会事業研究所年報 1996; 32: 213-243
- 7) 畠山由佳子. 児童養護施設の自立支援プログラムに対する評価測定. 関西学院大学社会学部紀要 2002; 91: 137-147
- 8) 村瀬嘉代子. 「生活」を基本におく専門的支援. 児童養護 2013; 143: 30-33
- 9) 永井亮. 児童養護施設における被虐待児への支援—ソーシャルワーカーによる専門的支援の技法—. ルーテル学院研究紀要; 2005; 89-100
- 10) 宮内俊一. 問題行動とコミュニケーション: 児童養護施設におけるソーシャルスキル・トレーニングの実践と成果. 名寄市立大学紀要2013; 7: 37-43
- 11) 志知朝江. 異文化シンドローム—日米摩擦の渦の中で. 東京: 北泉社, 1988
- 12) 長田友紀. 1990年代のアメリカにおけるコミュニケーション教育. 全国大学国語教育学会 2004; 2004-10 137-140
- 13) JAM ネットワーク. 親子で育てる「じぶん表現力」. 東京: 主婦の友社, 2002
- 14) 高取しづか. JAM ネットワーク. イラスト版気持ちの伝え方 コミュニケーションがうまくなる44のトレーニング. 東京: 合同出版, 2007
- 15) 佐藤正二, 佐藤容子. 学校における SST 実践ガイド—子どもの対人スキル指導—. 東京: 金剛出版 2006, 13-18
- 16) 安達知郎, 東海林渉, 佐藤恵子. 児童のコミュニケーション・スキルに関する主体性モデルの提示—新たな心理教育プログラムの開発に向けて—. 東北大学大学院教育研究科研究年報 2009; 57: 269-281
- 17) JAM ネットワーク HP. 子ども向け支援プログラム—NPO 法人 JAM ネットワーク (jam-network.net). 参照2017年12月17日

- 18) 菊池章夫. KiSS—18研究ノート. 岩手県立大学社会福祉学部紀要 1988; 6: 41-51
- 19) Rosenberg M, Society and Adolescent Self-image. Princeton University Press, 196520) 古荘純一. 小学生版および中学生版 QOL 尺度を用いた精神疾患の早期発見の検討. 日児誌2011; 115: 760-768
- 21) 柴田玲子, 根本芳子, 松嵩くみ子 他. 日本における Kid-KINDLR (小学生版 QOL 尺度の) の検討. 日児誌2003; 107: 1514-1520
- 22) A. W ホープ. 自尊心と認知行動療法—子どもの自信・自立・自主性をたかめる. 高山巖監訳 東京: 岩崎学術出版社, 1992
- 23) 戸ヶ崎泰子, 岩上高志, 嶋田洋徳 他. 中学生のセルフエスティームに関する研究 (1) —セルフエスティームと社会的スキルの関係—. 日本心理学会 第62回発表論文集 1998; pp962
- 24) 池谷貴彦, 葛西真記子. 児童の社会的スキルと自尊感情の向上に関する研究—ピア・サポート・プログラムの実践を通して—. カウンセリング2003; 36: 206-220
- 25) 佐藤貴史. 小学校高学年における自尊感情を高めるための指導に関する研究—コミュニケーションプログラムの実践を通して. 青森県総合学校教育センター研究紀要 2003; 2012. 3 E3-03
- 26) 柴田玲子. 小学生版・中学生版 QOL 尺度. 子どもの健康科学 2012; 13: 39-46.
- 27) 渡辺美那子. 養護施設児の自尊感情と精神的健康の関連について. 大坂大学臨床老年行動学年報 2000; 5: 54-62
- 28) 門永朋子. 児童養護施設における子どものレジリエンスの特性に関する考察—高校進学をめぐる入所児の語りから—. 子ども家庭福祉学 2012; 12: 35-44
- 29) Rutter M, Andersen-Wood L, Beckett C, et al. Quasi-autistic patterns following severe early global privation. English and Romanian Adoptees (ERA) Study Team. J Child Psychol Psychiatry. 1999; 40: 537-49.
- 30) Furusho J, Isozaki Y, Iwanami A. Report on Two Cases of Adequate Medical Support System Using the Japanese Version of Kid-KINDL^R Questionnaire for Children with ADHD. The Showa University Journal of Medical Sciences 2014; 26: 237-243
- 31) 古荘純一, 久場川哲二, 佐藤弘之, 他. 軽度発達障害児における小学生版 quality of life 尺度の検討. 脳と発達. 2006; 38: 183-186
- 32) 柴田玲子, 松嵩くみ子. QOL 尺度の実用化. 古荘純一ほか編. 子どもの QOL 尺度その理解と活用. 診断と治療社 2014, pp29-37.
- 33) 古荘純一 日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか 児童精神科医の現場報告 光文社新書 2009
- 34) 磯崎祐介, 古荘純一. 発達障害と自己認識: QOL (quality of life) と自尊感情に着目して. 教育研究. 青山学院大学教育学会紀要 2015; 59: 57-66
- 35) 古荘純一. 「いい親」をやめるとラクになる 子どもの自己肯定感を高めるヒント. 東京: 青春出版社, 2019